

日本の高度成長を支えた 京浜工業地帯



川崎臨海工業地帯造成事業起工式の様子



工業地帯の様子



工事の様子



海に伸びる工業地帯

戦時中の空襲で壊滅的な打撃を受けた京浜工業地帯は、戦後の駐留軍接收でやむを得ず一時停滞します。しかし、昭和25（1950）年の朝鮮戦争の特需を契機に、重化学工業の集中的な設備拡充が進み、日本の高度成長を担う中心的な工業地帯へと発展しました。

戦後復興に伴う工業用地の不足を受け、昭和20（1945）年に廃止された県営旧京浜臨海工業地帯造成事業（川崎臨海工業地帯造成事業）が再開し、約445haの埋立により、昭和38（1963）年に浮島町が完成します。

さらに、昭和33（1958）年に扇島埋立造成事業が着手され、約227haの埋立が実現します。県営に加え、横浜市や川崎市、日本鋼管株式会社（現・JFEスチール株式会社）による埋立も行われ、京浜工業地帯は次第に拡張していきました。

県営川崎臨海工業地帯造成事業で造成された埋立地には、当初計画の約3倍となる計27社から分譲申込がありました。分譲の大半を占めたのは、石油精製や石油化学など、国が目指す産業構造、海沿いの立地条件に適した業種でした。

こうした企業が集積し形成されたコンビナートによって、京浜工業地帯は、さらに発展していきました。石油コンビナートをはじめ、自動車、電機など多様な企業が立地した京浜工業地帯は、重化学工業の拠点として、戦後日本の高度成長を支える重要な役割を果たしたのです。

写真の出典：神奈川ニュース映画



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ